

『建礼門院右京大夫集』研究

―家集における隆信の位置―

岡 崎 三 智

一

『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』と略称する）を一読して誰もが感ずるのは、彼女の自意識の強さと、資盛追慕にみられる純情であろう。「なべての人のやうにはあらじ」という彼女の強い自意識は、平清盛の孫、資盛とのゝのがれ得ぬ契りによって崩され、右京大夫は恋の道にはまり込んでいく自分を客観的に捉えながらも「なべての人のやう」な一面をみせていくのである。資盛との恋が「なべて」の恋の経過をたどり「なべて」の結末を見せたとしたら、彼女は高い自尊心をもちながら恋によってその自尊心を失っていった一介の女房にすぎなかったかも知れない。しかし、歴史の流れが彼女の人生を大きく変えた。彼女は恋人との生別、死別を経験し、自らの人生を「ためしなきも

の」とする。そして、この世にあって「身をよくなきもの」としながら資盛との思い出の世界に生き続ける。かつて思い描いた自画像はゝのがれ得ぬ契りによって一時消え去ったが、ためしなきうき契りによって彼女が考えもしなかった新しい自画像が描かれた。外的要因が大きかったにせよ、彼女の自意識は、まさに彼女の人生を「なべての人のやう」でないものにしたのである。こうした右京大夫の人生の記録は、その特異な体験だけで十分読者に感銘を与えるものであるが、さらに彼女の強い自己観照の精神と才知とに裏づけられて『右京大夫集』は自照文学にあって私小説的まとまりをみせている。

今、この家集から資盛の存在を取り除けば、かわって大きく浮び上がってくるのは高倉天皇、中宮徳子、そして藤原隆信である。天皇、中宮は常に右京大夫の仰ぎ見る存在であり、家集が宮

廷讚美に始まるように、後に彼女が迎えることになる人生は、二人を中心としたサロンから展開されていった。したがって、この二人が右京大夫の「ためしなき」人生においていかに大切であったかは言うまでもない。

それでは隆信は、どのような意図のもとに描かれ、彼女の人生にどのような位置を占めていたのか。本論では『藤原隆信朝臣集』（以下『隆信集』と略称する）との比較によって右京大夫と隆信の恋をなるべく詳しく把握し、隆信の存在を家集に残さなければならなかった作者の心理を考えてみたいと思う。

（引用及び歌番号は『建礼門院右京大夫集』『平安鎌倉私家集』『岩波古典文学大系』『藤原隆信朝臣集』『私家集大成』中世Ⅰに拠る）

二

『隆信集』が『右京大夫集』の資料として重要視されてから、様々な考察が行なわれ、従来の右京大夫像を崩す彼女の新しい面が見出された。それら諸説は同じ面を打ち出しながらも、一つ一つの歌の享受に微妙な違いをもっている。ここでは両家集にみられる歌を比較しながら「なべての人のやうにはあらじ」という自意識をもつ右京大夫が隆信との関係においてどう変わっていった

かを見ていきたい。

二人の出会いはいは『隆信集』の簡潔な詞書に対して『右京大夫集』がその状況を詳しく語っている。四月十日の夜ふけ、少なからぬ関心を以前より抱いていた二人は、

135 おもひわくかたも渚による波のいとかく袖をぬらすべしやは
と申たりしかへし

136 おもひわかでなにと渚の波ならばぬるらむ袖のゆへもあらじを

という歌をもつて文を交わし始める。この後『右京大夫集』ではもう一首、

137 もしほくむあまの袖にぞ沖つ波心をよせてくだくとはみし

という返歌が続く、それを押し返して隆信から、

138 きみにのみわきて心よる波はあまの磯屋にたちもとまらず

という歌がよこされる。これに対し『隆信集』は『右京大夫集』一三六の歌の後に、

667 君ならで誰にか袖をかこつべき猶思ひわくかたはなければ

の歌を続けている。右京大夫の強い自意識とそこからくる警戒心を思う時、『右京大夫集』にあるように初めから隆信に対して二首の歌を返したとは思えない。ここは一三六・六六七・一三七・一三八というやりとりが続いたのではないだろうか。

理由のない涙でしたら私のせいではないでしょう

と言ってくる右京大夫を押し返して隆信は、六六七の歌を送って

よこすのである。そこで右京大夫は「よしある尼」の事を出して隆信の顔色をうかがうが、隆信は尼を否定し、ますます強く右京大夫に迫ってくるのである。隆信が一三七・一三八の歌を載せていないのは、尼の存在に触れたくないからであろうが、右京大夫が『隆信集』六六七の歌を載せていないのは何故だろうか。右京大夫には歌などをものに書きつけておいた様子もみられるので、単に記憶から欠落したものとは思えない。おそらく、一三七・一三八の贈答歌を書きとめておきたいという気持ち先にとつて六六七は省いてしまい、そのため返歌が二首続き、たとえそれが右京大夫の好意の表われにとられても彼女はあまりこだわらなかつたのではないだろうか。隆信にとっては触れたくない尼の存在が右京大夫にはむしろ重要だったのである。

『右京大夫集』には記されていないが『隆信集』には、この後この返事はいかにいふべしともおもほえずとて

という詞書を伴って

668 うつろはむことこそかねてうかりけれ色なる人のちらすことのは

またこれより

669 うつろはむことなほもひそ浅からぬ色をば色にそむとしらずや

の二首が続いている。尼の存在を否定し、右京大夫にのみ心をよせているのだと強く言ってくる隆信に返す言葉をなくした右京大夫は本心をちらりとみせて

色好みの言葉はその顔色が変わっていくのと同様にすぐ変わってしまうことが思われていやなのです。

という歌を送る。すると隆信は

変わってしまうなどとは思わないで下さい。顔色に艶が加わっていくように浅くはない私の想いに色が加わっていくことをあなたは知らないのですか。

と右京大夫の歌を否定してくるのである。二人の恋の始まりにおいては、巧妙な隆信の歌に右京大夫が押し切られたという感じをもつが、こうした形は今後ともみることになる。

隆信の方から頻繁に文のあったことは、両家集一三九・六七〇の詞書から認められるが右京大夫はそれらの文に対し「いとこまやか」に返事を送りつつも「よのつねのありさまはすべてあらじとのみぞおもひしかば、心づよくてすぎ」ていたらしい。六七〇の詞書の中に「たくもの煙にはいかゞ思たつべきを、あづまときゝしかばとて思ひたえなんもいかゞはせん」という右京大夫の返事がある。「たくもの煙」は『後拾遺集』卷十二・恋二

かたらひける女の、こと人にもいふときとてつかはしける

藤原実方朝臣

浦風になびきにけりな里のあまのたくもの煙心よわさは^{註1}(706)

に拠ると思われるが、上条彰次氏は、詞書までふまえているかどうかを問題にしておられる。氏は、この右京大夫の返事を「きく

ことや有けむ」(六七〇詞書)という事柄以前の来信とし、歌自体からは、そこまでの三角関係を想定することが必ずしもできないので、隆信の求愛を受けて靡くべきかどうか迷っている程度の単純な意味合いでの引歌として理解して良いとされながらも、事実関係からいえば、右京大夫と資盛との何らかの交渉はすでであったのだから深刻な三角関係はまだであるとしても形式的には詞書を含めた受容であると述べておられる。また「あづまときゝしかば思ひたえなんもいかゞはせん」は、『後撰集』卷十一・恋三

女のもとにつかはしける

伊尹朝臣

人しれぬ身は急げども年をへてなどこえ難きあふ坂の関(732)

かへし

小野好古朝臣女

東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかはこえむ逢坂の関(733)

や『後拾遺集』卷十三・恋三

伊勢の齊宮のわたりよりのほりて侍りける人にしのひてかよひける事をおほやけもきこしめしてまもりめなどつけさせたまひてしのびにもかよはずなりにければよみ侍りける 左京大臣道雅

あふさかはあづまぢとこそきゝしかど心つくしのせきにぞ有ける(748)

いまはたゞおもひたえなんとばかりを人つてならでいふよしもがな(750)

などの歌に拠ると考えられている。樋口芳麻呂氏はこれらの歌を参考^{註2}に「あづま」を「逢坂の関」―男女が逢うことを懸ける―の

向こうの地、すなわち逢いたくても手の届かない彼方を譬喩的に述べたものと解釈されている。これに對^{註3}して上条氏は「思ひたえなん」が道雅歌を下にふまえていることを動かせないとして「あづま」の部分も道雅の歌に重点をおいて考えることに一理あるとされている。したがって「あづまときゝしかば」「思ひたえなん」の主体はどちらも右京大夫ということになる。前述したように、上条氏は『隆信集』六七〇の詞書にある右京大夫の返事を「きくことや有けむ」という事柄以前の来信とされるので両方の主体を右京大夫ととられるのであるが、ここはやはり「きくこと」〓右京大夫の返事ととった方が自然ではないかと思われる。「あづまときゝしかば」「思ひたえなん」の主体はどちらも隆信となり、

たくもの煙のように他の男性に想いをよせたりは、決していたしません
が、私が(資盛と)契りを結んだと聞いてあきらめてしまうのでしたら
仕方がありません。

と言ってよこした右京大夫に隆信は、

139 浦やましいかなる風のなさけにてたくもの煙うちなびきけん

の歌を送ってくるのである。この歌は『隆信集』では「なさけにて」が「なさけにか」に、「うちなびきけん」が「うちなびくらん」となっている。これは右京大夫が事実、靡いてしまっている

ので「うちなびきけん」と受け取ってしまったとも考えられるが
あるいは過去の事実にすることで、現在自分が二人の男性に靡い
ていないことを読者に合理化するための右京大夫の脚色と考えら
れないこともない。右京大夫は、

140 きえぬべき煙のすゑは浦風になびきもせずたゞよふ物を

の歌をかえして資盛との関係を否定してくるのであるが、そこ
に隆信との関係も続けていきたいという彼女の本心をみるこ
とができる。「なべての人のやうにはあらじ」という自意識もち
「よのつねのありさまはすべてあらじとのみ」思つて過してきた
右京大夫も、一度恋愛関係をもてば、「なべての人」のような一
面をみせ始めるのである。

141 あはれのみ深くかくべき我^(を)おきて誰に心をはさすなるらむ

なおも執拗に言ってくる隆信に右京大夫は、

142 人わかずあはれをかはすあだ人に情しりてもみえじとぞ思ふ

とやり返してくる。上条氏^{註4}は、この一四一・一四二のやりとりを
一三九・一四〇と同様に隆信の重心は「たれに心をはさすなるら
む」という下句にあり、やはり資盛を意識しての嘆願調であつて
それに対する右京大夫の返歌も資盛との関係についての弁解調と
する方が自然であるとし「あだ人」を資盛と解されている。しか
しこの「あだ人」を資盛とすることには少し無理があるように思
える。ここはかねてから色好みの評判の高い隆信の言葉を警戒し

ての右京大夫の意志ととりたい。

この後『右京大夫集』では、まつりの日に詠んだ歌が続き、二
人がたびたび文を交わしたことがうかがわれる。『隆信集』には
六七〇の歌の後に、

かくいひても猶あかず覚えて

671 あづまぢときくにいとゞたのまるゝあぶくま河にあふせ有やと

が続いている。この歌は六七〇の詞書の「あづまときゝしかば」
を承けたもので、資盛との関係をききつけた隆信が、そのことを
追求しながら右京大夫に逢瀬を求めている。右京大夫の言葉を巧
みに用いての隆信の歌に二人のやりとりは隆信ペースとなり、右
京大夫は、

145 こえぬればくやしかりける逢坂をなにゆえにかはふみはじめけむ

を詠むことになるのである。この歌には右京大夫の後悔と困惑と
が表わされている。互いに遊戯的な会話を楽しんでいたはずが、
隆信の言葉に自分を見失い、しだいに遊戯を離れ、隆信に傾斜し
ていく。そうしてついに隆信に許してしまった自分を厳しく見つ
めて悩んでいるのである。客観的に自己を見つめる目をもちなが
らも、隆信とのやりとりにおいて追いつめられれば感情が先行し
媚態ともとれるような歌を詠んでいる。後になってそうした自分
を歯がゆく思うのである。しかも相手が隆信のような男性である
だけにその悔しさはひとしおであろう。

その後『右京大夫集』には、

車おこせつゝ人のもとへゆきなどせしにぬしつよくさだまるべし
などきゝし比、なれぬる枕にすぐりのみえしをひきよせてかきつ
くる

146 たれか香に思ひうつると忘るなよ夜なく馴れし枕ばかりは

「返りてのちみつたりける」とてやがてあれより

147 心にも袖にもとまるうつり香を枕にのみやちぎりおくべき
とある。

上条氏は、一四七の歌を『玉葉和歌集』の作者名記通り資盛の

歌とされている。氏は一四六詞書中の「ぬしつよくさだまるべ

し」について樋口芳麻呂氏『うきなみ物語考』を参考に、隆信と中

務少輔長重女との間には早く隆範が生まれており、治承元年には

信実も生まれ妻の死没は治承三年秋であるから、当時（治承二年

とする）隆信に年若い正妻の定まったという考えはもはや通用せ

ず、逆に資盛についてみれば、当時十七歳で「（重盛の）子ニテ

資盛トテアリシヲバ、基家中納言増ニテアリシ。サテ持明院ノ三

位中将トゾ申シ」という『愚管抄』巻第五、高倉の記事や、重盛

の病没が治承三年ということを考え合わせて資盛が基家の女婿に

なったのが、治承二年夏頃であった可能性は高いと述べておられ

る。確かに、この時隆信にはすでに正妻がいたと思われるが治承

二年にぬしがつよく定まったことは、治承三年秋の妻の死と深く

関わっているのではないかと思われる。多彩な人生の中で隆信が
最も愛情をかけ、その死を生涯悼み続けた「おやこのよはひな
る」（『隆信集』四〇〇詞書）妻の病が重くなり、隆信は妻を自邸
に移すかなにかしたのであろう。ぬしがつよく定まることを聞き
つけた右京大夫は、自分が使い慣れた枕を、ぬしが使うことを念
頭において一四六の歌を詠むのである。枕によびかける右京大夫
には、これまで隆信に関わってきた女性の中で自分こそが最もす
ばらしい女性だという意識があったのかも知れない。それだけに
枕にこめた右京大夫の想いは複雑なものであったにちがいない。

『右京大夫集』一四八、一四九の

をなじ比夜床にてほとゝぎすをきゝたりしに、又かはらぬこゑに
てすぎしを、そのつとめてふみのありしついでに

148 もろともにこと語りひし曙にかはらざりつるほとゝぎすかな
かへしに「われしもおもひいづるを」など、さしもあらじとおぼ
ゆることどもをいひて

149 思ひいでてねざめしとこのあはれをもゆきて告げける時鳥かな

は『隆信集』六七六・六七七にも載せられている。曙に一人で聞
くほととぎすの声に右京大夫は感傷的になり、かつて隆信と共に
聞いた時を思い出し、今の寂しさを訴えているが、隆信からは、
「さしもあらじとおぼゆることども」が返ってきただけのよう
である。『隆信集』では「曙」が「あか月」に、「かはらざりつ

註7

る」が「おなじ声なる」となっている。久保田淳氏の御指摘のようには隆信が贈った歌の方が原形で右京大夫の方は後日、手を加えたものかも知れない。確かに「変らざりつる」の方が「おなじ声なる」よりも皮肉が利いていると思われる。

またしばしおとせで、ふみのこまぐとありしかへしに、などやらん、いたく心のみだれて、たゞみえしたちばなを一枝つゝみてやりたりしに、えこそ心えねとて

150 むかしおもふ匂ひかなにぞ小車にいれしたぐひの我身ならぬにかへし

151 わびつゝはかさねし袖のうつり香に思ひよそへておりし橘

その後、しばらくの日数を経て隆信から細やかな手紙があった。

契りを結ぶまでは資盛という競争相手がいたこともあって、熱心に手紙を送っていた隆信も、ぬしがつよく定まってからはあまり手紙をよこさず、右京大夫には心細い日々が続いていたことと思われる。そして、思い出したように時折よこす手紙には、細々と調子の良いことが書かれていたのだろう。『右京大夫集』には、そうした自分にひどくやりきれなくなったのか、眼前の橘を一枝折って文も添えず送ったようになっていいる。

一方、『隆信集』によれば

物いひわたりし女のもとより、花たちばなを文につゝみていかなるすちの心ともをしはかり給へとかきたりければ、いと心えかたくなの昔の人の袖のかそするといひけむたくひにも、思ひよそふ

へきかたなく、またはむあんしんの車にいれけむためしをおもふにも、この身のあやしきにはことたかひたれはいひやりし

679 昔おもふにほひかなにそをくるまにいれしたくひの身にあらなくに

女かへし

680 いつれとはおもひもわかすなつかしくとまるにほひのしるしはかりに

とあり、花たちばなが文で包まれ「いかなるすちの心ともをしはかり給へ」と書いてあった。右京大夫は『古今集』巻三、夏

さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする (139)

の歌を意図して橘の花を送ったのだろう。『隆信集』の詞書からは、しだいに自分に対して冷たくなってゆく隆信に「昔の人」の歌を想起させることによって寂しい気持ちをわかってもらいたいようにかして心をつなぎとめておきたいという右京大夫の緊迫した心情が読みとれる。よこされた橘の花を見て、隆信はもちろん『古今集』の歌を思い浮べるが自分が右京大夫に対して「昔の人」となったわけではないから、まずそれを否定し、自分は潘安仁のようでもないと返してくるのである。期待していた返事の得られなかった右京大夫は、隆信をやはり心配していたように心の移りやすい不誠実な人と解したのであろう。この隆信の歌に対する右京大夫の返事は、一五一・六八〇と両家集で異なっている。六八〇には隆信を懐しく思う右京大夫の気持ち素直に表わされているが、一五一を見ると思い悩みながらも袖をかさねてしまった

ことへの後悔が今さらのように述べられている。久保田氏が指摘^{註7}されていられるように、右京大夫が本当に隆信に返したのは『隆信集』に納められる六八〇の歌であって、こうした歌を詠んで隆信をいつまでも思慕し続ける自分に厭気がさして右京大夫は一五一の歌を家集に載せたのかも知れない。

「むかしおもふ句かなにぞ」（『右京大夫集』一五〇、『隆信集』六七九）の歌以後、同じ歌が両家集にみられることはないが、同時期の二人のやりとりと思われるものは個々にいくつかみることができる。「わびつゝは」以後の『右京大夫集』の歌をみてゆきたい。

たえまひさしくおもひいでたるにたゞやあらましと返々おもひしかと心よわくてゆきたりしに、くるまよりおるゝをみて「世にありけるは」と申しをきゝて心ちにふとおぼえし

152 ありけるといふに辛さのまさるかななきになしつゝすぐしつるほど
久しぶりに隆信からの迎えの車が来て、右京大夫はこのまま行かないでおこうかと思うのであるが、やはりどうしても気弱く、こ
とわりきれずに行ってしまうのである。後悔を繰り返しながらも
想いを断ち切れない右京大夫のつらさがうかがえる。そんな彼女
に対して発せられた隆信の「世にありけるは」という言葉は、ち
よつとした冗談にすぎなかったのであろうが右京大夫の心に強く
響いたものと思われる。

夢にいつもくみえしを「心にかよふにはあらじをあやしうこそ」と申たるかへり事に

153 かよひける心のほどは夜をかさねみゆらん夢におもひあはせよ
かへし

154 げにもその心のほどやみえつらむ夢にもつらきけしきなりつる

深く心を痛めながらも、右京大夫は隆信に未練を残している。それが毎晩夢となって現われるのであるが、そうした右京大夫の訴えに隆信はいつものように実のない適当な返事を送ってよこすのである。右京大夫も負けずに嫌味を言ってやるが、それは彼女自身をよりつらくし、悔恨へとひきずり込むことになるのであろう。

せんなきことのみおもふころ、いかでかゝらずもがなとおもへど
かひなき心うくて

156 思ひかへすみちをしらばや恋のやまは山しげ山わけいりし身に

いづかたにか経のこゑほのかにきこえたるも、いたく世の中し
みぐゝと物かなしくおぼえて

157 まよひいりし恋路くやしき折にしもすゝめがはなる法の声かな

一五六にも恋の道に入り込んでしまった自分を捉えながら、どうすることもできずに煩悶している右京大夫の姿をみる事ができる。そして、その頃耳にした経のこゑは、右京大夫の心にしみ込んで悔恨の念を一層強くし、出家を思わせるのである。

『右京大夫集』をみるかぎりにおいては「なべての人のやうにはあらじ」という自意識を、資盛・隆信の間で失っていった自分

を静かに顧みて出家を思う右京大夫を想像することができるが、『隆信集』をみると多少ニュアンスは違ってくる。

女のもとより暁のねぎめにすゝめありきつるあみたのひしりのこゑも我身ひとつにしむこゝちして、思ひことなきとこにはよもきゝ給はさりつらむといひたりしかは

722 我はたゝあか月ことにねさめしてみゝなれにけるみだのとなへをかへし

723 うらやましいかなる人の夢さめてみたのとなへにみゝなれぬらん
詞書中の隆信に送られた文をみれば、右京大夫は出家をほのめかして隆信の心を必死につなぎとめておこうとしているように思える。限界に立たされた彼女にとって出家を口にすることは、最後に残された賭だったかも知れない。しかし、こうした手段も隆信には通用しなかった。もとより彼女にとって、この恋のやりとりは知的な遊戯でなければならなかったのである。右京大夫の言葉はむしろ逆に隆信の心を離れさせたとも言えるのではないだろうか。

普通、隆信との恋をテーマにしたとみなされる『右京大夫集』

註⁹

一三五―一五四の歌群を上条氏は、資盛との恋の贈答歌がきわめて隠微なかたちで二重構造的に挿入されていると考えられている。氏は、右京大夫にとっては資盛との愛こそが大切なものであったから、何故、隆信との恋に陥ったのかの弁解・資盛・隆信両者の間にはさまれたの複雑な三角関係の中でこういう形態でしか語り

得なかった真相の告白が、この場面の主題として働いており、それが意図的な二重構造と密接な関係を有していると述べられている。確かに、この家集の中心には資盛への思慕が据えられており上条氏の御指摘のように、一四五の詞書「かやうにて何事もさてあらて」などには隆信とともに資盛との関係も仄めかされているが『隆信集』との比較において、その流れを追ってみれば、この場面はやはり隆信との恋のやりとりを描いているのではないだろうか。隆信と右京大夫の恋は、資盛の冷たさゆえのものではなくましてここが、それを資盛に怨じてみせるための叙述であるはずはない。隆信は資盛と違った意味で右京大夫の中に存在し、この家集の一場面を担うことになったと思われるが、それについては改めて考えてみたいと思う。

出家をほのめかした歌の後、『右京大夫集』には

ちゝおとどの御ともにくまのへまいるときゝしを、かへりてもし
ばしをとなければ

158 忘るとはきくともいかに三熊野の浦のはまゆふうらみかさねん

とおもふも、いと人わろし

ひとゝせなにはのかたより帰てはやがておとづれたりし物をなど
おぼえて

159 沖つ波かへれば音はせし物をいかなる袖のうらによるらむ
と続いている。熊野参詣から帰っても便りをよこさない資盛に対

して、忘れられてもしかたがない、恨んだりほしえないと思いが
らも、先年、住吉に詣でた時には、帰ってすぐに訪れてくれたこ
とを思い出し、今は誰の許へ行っているのだろうと嘆いているの
である。歌を詠んで自分に言いきかせてみても、制することので
きない資盛への想いが表われている。

雲のうへもかけはなれ、そのちもなほとき／＼おとづれし人を
もたのむとしはなけれどさがにむさしあぶみとかやにてすぐる
に中／＼あちきなき事のみまされば、あらぬ世の心ちして、心み
んとてほかへまかるに、反故どもとりしたゝむるにいかならむ世
までもたゆまじきよし、返／＼いひたることの葉のはしにかきつ
けし

162 ながれてとたのめしことも水茎のかきたえぬべき跡のかなしさ

隆信との恋を語る最後の歌である。右京大夫はすでに宮仕えをや
めているが隆信は時々、右京大夫を訪れていたようである。隆信
を頼りにしているわけではないが「さすがにむさしあぶみとかや
にて」過していた。この「むさしあぶみ」は『隆信集』にも、み
られる。

718 女のもとへ文つかはしたりし返事にむさしあぶみとおぼえてとば
かりかきたりしにこれより又をしかへして
うるさしといふだにつらしむさしあぶみしねとはかけて思はざらな
ん

かへし

719 とはぬだにつらしときゝしむさしあぶみしねとはかけて思ふべきか

は

とてうるさからぬむさしあぶみになんと、かきたりしかば

720 かけてだにつらくはあらじむさしあぶみふみうるさしといふなる

らん

かへし

721 よしさらばかけてもいはじむさしあぶみふみうるさしといふなも

たつ

右京大夫の返事「むさしあぶみとおぼえて」をきっかけに『伊勢
物語』第十三段、

武蔵鑑さすがに掛けて頼むにはとはぬもつらしとふもうるさし
とへばいとふとはねば恨む武蔵鑑かゝるをりにや人はしぬらむ

をふまえてのやりとりが続く。隆信の文を「とはぬもつらしとふ
もうるさし」と言う右京大夫に隆信は

私からの便りのあるのは面どうでいやだというのは辛いことです（この
辛さのせいで）恋ひ死してしまいなさいとかりそめにも思っではない
でしようね（恋ひ死してしまいなさいと言うのですか）

と押し返してくる。すると右京大夫は

あなたが便りをよこさないのが辛いのです。恋ひ死してしまいなさいと
思うことがありますか。思うはずがありません。

と言って「あなたから便りがないので、うるさいなどということ
はありません」と書いてよこす。右京大夫の「むさしあぶみとお

ばえて」から隆信は『伊勢物語』の女の歌の「とふもうるさし」という言葉だけを拾って文をよこす。それに対して右京大夫は、「とはぬもつらし」の方を訴えたいので「とはぬだに」の歌を返すのであるが、隆信は

便りがなくて辛いなどということは、けっしてありませんまい。あなたが私からの便りを煩わしいといって嫌っているのでしょうか。

となおも強く押し切ってくるのである。右京大夫は仕方なく

あなたがそうおっしゃるならば武蔵鑑などとはけっして言いませんまい。あなたからの便りを私が嫌っているなどという評判がたつては困りますから。

と妥協してしまう。彼女は隆信からの文までが途絶えてしまうことをひどく恐れていたのだらう。右京大夫の口から発せられた、

「むさしあぶみ」という言葉もまた隆信によってうまく操られてしまうのである。『右京大夫集』には単に「さすがにむさしあぶ

みとかやにてすぐるに」とあるだけだが、そこには『隆信集』の語るようないきさつがあったのだらう。そうしてみると、次の、

「中／＼あぢきなき事のみまされば」という言葉に表わされる右京大夫の気持ちがいっそう良く理解されるように思われる。そして隆信をあきらめようと、よそに出掛けるために古い手紙などを整理すれば、いつまでも離れずにいようと繰り返し書いてある。今隆信と別れるにあたって目にするこうした文字は、移ろいゆく

人の情と無関係に幸福な日々の名残りとどめ、右京大夫の悲しさをいっそう強くするのである。

『右京大夫集』と『隆信集』を照合することによって二人の恋のいきさつを細かくみることができた。二人が出会ってから契りを結ぶまで隆信は執拗に右京大夫に迫ってきた。そして、そこでは同レベルの歌が詠み交わされていた。しかしながら契りを結んだ後、隆信は今までのように積極的ではなく、ありきたりの文をよこすようになる。すると今度は右京大夫の方が隆信に傾斜し、関係を保とうと必死になる。ここには遊戯的な余裕などはすでになく右京大夫の切実な訴えをみるばかりである。そしてついには文さえ途絶えてしまうことを恐れながらも別れを決意する。

隆信との恋をみるかぎり「なべての人のやうにはあらじ」という自意識をもった右京大夫も、一旦恋に落ち入れば、媚態、怨み嫉妬といった「なべての人」の一面をみせる。こうした右京大夫の一面は、強い自意識、資盛追慕にみられる純情という従来の右京大夫像にマイナス面を与えてしまうのだらうか。私はそうは思わない。資盛との関係における右京大夫は確かに純粋で美しいがそうした右京大夫像は私たちの憧れや理想の対象とはなり得ても特異な人生を歩んだものとしてどこかかけ離れた印象をもたせ、心に強く迫りくるものがない。しかし隆信との関係において彼女

が「なべての人」以上に演じてみせる媚態や、怨み、嫉妬は右京大夫像に人間味を加え、その魅力を増しているように思えるのである。

三

先に考察した隆信との恋の経緯が作者のいかなる心理のもとに描かれることになったのかを考える前に、家集の構成について、記事・内容を中心にみていきたい。

『右京大夫集』研究のほとんどは、高倉天皇崩御に関する記事（二〇三）までを上巻、以下を下巻として論がすすめられている。内容を大まかにみれば、上巻は宮仕えの幸福な時期に始まり、題詠歌群をはさんで資盛、隆信との恋が語られている。しかも高倉天皇、中宮讚美に始まり、高倉天皇崩御に終るという首尾の一致から高倉天皇薨去を直接の動機として主に宮廷生活を描いたものとされている。これに対して下巻は詞書の割合が多く、平家の都落ちから資盛の死、そして再出仕までの一貫した資盛追慕、資盛亡き後の作者の生き方が述べられている。この際だった内容の明暗が、一層読者に資盛亡き後の作者の悲しみを思わせるのである。

寿永、元暦などのころの世のさわぎは夢ともまぼろしともあはれともなにともすべてくいふべききにはもなかりしかば――

に始まる平家の都落ちとそれに伴う作者の悪夢をみているような心情の記述の後、重衡の三位中将が捕虜となり入没した折の様子が描かれる。（二二三）その後のひどく変り果てたという評判に右京大夫は、以前の重衡を思いやり夢にも考えることのなかった状況を悲しむのであるが、この重衡に関しては以前に、

などおもひつゞくるほどに宮のすけのうちの御かたの番に候けるとていりきて、れいのあだごともしきこともさま／＼おかしきやうにいひて我も人もなのめならずわらひつゝはてはおそろしき物がたりどもをしておどされしかば、まめやかにみなあせになりつゝ「今はきかじ、のちに」といひしかど、猶／＼いはれしかば、はてはきぬをひきかづきて、きかじとてねてのちに心におもふ事

194 あだごとにたゞいふ人の物がたりそれだに心まどひぬるかな

195 鬼をげにみぬだにいたく恐ろしきに後の世をこそ思ひしりぬれ

とあり重衡の陽気な人柄が描かれている。重衡は『平家物語』巻十・千手前にも「平家はもとより代々の歌人才子達候也。先年此人々を花にたとへ候しに、この三位中将をば牡丹の花にたとえて候しぞかし」とあり美貌で明るい性格ゆえに女房達の間では人気者だったらしい。また、重衡の入洛の記事の後には維盛入水の記事が続く。そこで右京大夫は類いまれな維盛の容姿、後白河天皇の五十の御賀に青海波を舞った様子などを思い浮べる。こうした維盛の美しさの描写も右京大夫出仕直後の記事の中にみいだすこ

とができる。

四

をなじ人の、四月みあれの比、ふじつばにまいりて物がたりせしをり権亮維盛のとをりをよびとめて「このほどに、いづくにてまれ心とけてあそばむとおもふをかならず申さむ」などいひ契りて少将はとくたゝれし、ふたえのいろこきなをし、さしぬき、わかかへでのきぬそのころのひとへつねのことなれどいうことにみえてけいごのすがたまことに絵物がたりいひたてたるやうにくしくみえしを中將「あれがやうなるみざまと身をおもはばいかに命もをしくて中／＼よしなからむ」などいひて

6 うらやましみと見る人のいかばかりなべてあふひを心かくらむ

少し離れた位置から見ると維盛はまさに絵物語にかきたててあるように端麗であった。その美しさは、右京大夫をはじめとする後宮女房達の憧れの対象となるだけでなく、実宗等、男性達の羨望の的となっていたことがうかがわれる。寿永、元暦の頃の騒ぎは、この重衡、維盛等をまき込み、悲惨な運命へと導いていった。右京大夫が家集を編纂するにあたり、平家滅亡に伴う自らの悲劇に力をそそいだとしたら、陽気な重衡、目にも鮮やかな維盛を描いた部分は、その後の悲劇の伏線、布石となっているのではないだろうか。高倉天皇、中宮を中心に二人をとりまく人々が織りなす宮廷生活の華やかさとその後の悲惨な運命という明暗が読者に与える効果を十分意図して作者はこの家集を編んだものと思われる。

前述した構成上の配慮は記事の割合からも明らかのように、作者が最も述べたかった資盛との悲恋を通しての自らの「ためしなき人生」を効果的に描くためのものである。それでは隆信との恋は純粋な資盛追慕を中心に据えるこの家集においてどのような意図のもとに描かれることになったのか。隆信は右京大夫の人生の中にどのような位置を占めたのか考えてみたい。

『右京大夫集』において隆信の占める割合はわずかであり、しかも平家都落以後、いわゆる後半部には全く姿をみせていない。しかしながら、前半部では、贈答歌数において資盛をはるかに上回っているのである。隆信との関係を描くことは、右京大夫がこの家集で最も述べたかった資盛との恋、彼への追慕における作者の純情を疑わせるばかりではなく、彼女の出仕時の決意である、「なべての人のやうにはあらじ」という自意識のもろさをも強く感じさせることになりかねない。にもかかわらず、右京大夫が隆信との恋に筆を割いているのは何故であろうか。他の部分で細かい配慮や脚色を行った彼女がただ単に事実を記したとも思えない。隆信は、この家集において、また右京大夫にとって何らかの意味をもっていたはずである。樋口氏は『隆信と右京大夫の恋』の中で『源氏物語』の「夢の浮橋」の巻のあとを承け、続編のようにして

書かれた『源氏物語山路の露』の作者を右京大夫とされる本位田^{註11}

氏の説を引かれ山路の露の作者を右京大夫と認めて良いならば、作者は匂宮と薫との三角関係に苦しんだ浮舟に強い関心を寄せていたと推察される。そして右京大夫が浮舟の生き方にひかれるゆえんを、右京大夫もかつて二人の男性との恋に悩んだ生々しい記憶を有するからであろうとされ、建礼門院女房時代を回想する時、自らの恋と浮舟の苦悩との類似が彼女の念頭をかすめ、物語の女性にも似た生き方をした過去の自分を懐しみ、いとおしむ気持ちが隆信との恋についても省筆を惜しめたのではないかと述べておられる。確かに資盛死後、亡き恋人の供養のために資盛の文反故を整理している時、右京大夫は『源氏物語』、「幻の巻」で紫の上の死後、出家を決意し、古い手紙類を処理する源氏を思い浮かべたりしている。そこでは

みるもかひなしとかや、源氏物語にある事思ひいでらるゝもなにの心ありてとつれなくおぼゆ

と『源氏物語』をそのまま明記しているが、その他にも『源氏物語』の影響と思われる所がいくつかみられる。そして右京大夫の人生観、恋愛観が物語類―特に『源氏物語』―から形づくられたものであり、物語の中の女性に共感や理想をもっていたとするならば、資盛との恋の途中に突然おきた隆信との恋を描く時、彼女

が浮舟の苦悩や生き方を念頭においていたということは十分考えられることである。しかし物語にも似た恋の苦悩の時期が作者の生涯にあったということを記すただけに、右京大夫は隆信の存在を描いたのであろうか。隆信との関係は、右京大夫が資盛との恋に煩悶している時期におこり、彼女は初めから隆信を「よ人よりもいるこのむときく人」として注視していた。「なべての人のやうにはあらじ」という自意識が崩れかけていた時期に、人一倍警戒心の強かった右京大夫が色好みとしての評判高い隆信と関係をもち、前述したような恋の展開をみせたのは、資盛とは異なる隆信の魅力にひき込まれたためではなかったろうか。『隆信集』との比較においてもわかるように、二人の間で交わされた文は『伊勢物語』をはじめとする多くの先行作品を駆使し、巧妙な言葉使いによって相手の心に探りを入れるという高度なものであった。両家集共にある程度の脚色はあるが、だいたいにおいて隆信の巧妙な歌に右京大夫は心を動かされ押し切られていったようである。しかし、はるかに年上の隆信を相手に右京大夫は時々彼を惑わせるような歌を詠んでもいる。彼女は自分の才知を十分発揮させ、隆信との恋の遊戯を楽しむ自分と、そうした自分に常に忠告を与える理性的な自分という矛盾の中で苦悩しながらも隆信の魅力に引きつけられていたのである。右京大夫が隆信との関係を描い

たのは、読者に浮舟を想起させるためだけでなく、忘れられぬ人として彼女の中に存在する隆信をどうしても書いておきたいという心に動かされてのものではなかっただろうか。しかし、右京大夫は、大宮の入道内大臣実宗、親宗の中納言、通宗の宰相中将など思い出多き人々の死を家集の最後にいわば挽歌として載せているにもかかわらず隆信の死については一言もふれていない。これに關して、草部了円氏は『世尊寺伊行女右京大夫集』で

茲に改めて注意したいのは、これほどの回顧の記録である下冊の中に建仁元年（一二〇一）六十歳で出家し元久二年（一二〇五）二月二十七日、六十四年の一生を閉じた隆信についてたゞの一字も是に触れていないということである。若し言う如く隆信と右京大夫とが嘗て夫婦關係にあったのなら何かひと言ぐらいの記述はあつて然るべきものであらう。元久二年には右京大夫は未だ五十五歳位である。それ程感情の枯渴した年令とは思えない。

と述べておられる。また樋口氏は、

隆信は右京大夫の前からみずから背を向けて去つていった男である。右京大夫の純情を遂に解しなかった男である、この調子の良い色好みを彼女は苦しみ傷つきながらあきらめてゆくのである。がそれとうらはらに日を追って遅しく成長する資盛への思慕がしだいに強さを増してくる（中略）『右京大夫集』後半部がその死によって自分との結びつきが確乎不動のものとなった資盛追慕の情で満たされ、隆信についてはその死（元久二年二月六十四歳）をさえ書留めようとしていないのも思えば当然かもしれない。苦いつらい恋の記憶のみを残した隆信は触れずにそつ

としておきたい男であつたはずだからである。

と言つておられる。樋口氏が言われるように確かに隆信は右京大夫からしだいに遠ざかつていったものと思われる。しかし『隆信集』恋の部を見てわかるように右京大夫は隆信の恋の相手としてかなり大きな位置を占めている。があくまで隆信が求めたのは、知的会話の交わせるすぐれた恋の相手としての右京大夫だったのである。それに対し、右京大夫は初めは遊戯的な恋を展開しながらも、しだいにその恋にのめり込んでいったのである。そうして二人の間のバランスはしだいに崩れ隆信が遠ざかつていくことになるのだが、たとえ苦悩と悔恨とを伴った恋であつたとしても、右京大夫をそこまで引きずり込んだ隆信の魅力を右京大夫は生涯忘れることがなかつたであらう。彼女が隆信の死を家集に記さなかつたのは彼への愛情の薄さからではけつてない。資盛との恋を語るに、彼の死は不可欠なものであつたが、隆信との恋にその死は必要でない。右京大夫にとって隆信は彼女の若い日に大きな位置を占めた大切な人であつて彼女が家集に残しておきたかつたのは、その時期の彼女なのである。かつて楽しい日々を共に過した多くの人達は歴史の流れの中で悲惨な最後をとげていった。そうした中で天寿を全うした隆信の死を記すことは、彼女の記憶の中に生々しく残る恋を遠い過去のものとするように思えてならなか

ったのではないだろうか。隆信もまた、作者の中に生き続ける人であり、彼への断ち切れない愛情ゆえに右京大夫はその死を記さなかつたものと思われる。

家集の中で、隆信との恋は浮舟にも似た作者の人生の一端を思わせる効果をもつ。こうした効果を右京大夫は当然考慮したものであるが、隆信の存在を記しておきたいという作者の内発的なものをも見落してはならないように思えるのである。

13 註2に同じ

(昭五四 日文卒)

註

- 1、上条彰次「建礼門院右京大夫集私見―隆信との恋をめぐる―」静岡女子大研究紀要十一号 昭53・2
- 2、樋口芳麻呂「隆信と右京大夫の恋」愛知教育大学国語国文学報第三〇号 昭51・11
- 3、註1に同じ
- 4、〃
- 5、〃
- 6 樋口芳麻呂「うきなみ物語考」国語国文 昭45・2
- 7 久保田淳「建礼門院右京大夫集評釈」一四、国文学 昭45・1
- 8 註7に同じ
- 9 註1に同じ
- 10 註2に同じ
- 11 本位田重美「山路の露の作者」国語国文 二四卷十二号
- 12 草部了円『世尊寺伊行女右京大夫集』笠間書房